プログレス　平成29年6月1日（毎月1回）発行

潮流

趣味を通して原点に還る

三明電機株式会社
代表取締役社長　近藤　綱亮

私の趣味の一つに絵画鑑賞があります。幼い頃から水彩画を描いていましたが、十七歳の時、ある画家の油絵を画集で見てその素晴らしさに感激しました。そして、大学生になり油絵の道具を入手して美術部に入りました。それから油彩の独特な魅力にはまり時を忘れて絵に没頭しました。仲間と共に自分達の展覧会のために徹夜をして作品を完成させたこともありました。社会人になって時間の確保が難しくなり絵を描くことからは離れてしまいましたが、十七歳の頃の感激は今でも忘れる事は無く、絵画鑑賞は続けており好きな画家の作品が名古屋に来ると知れば必ず足を運びます。

私の好きな画家の一人にパブロ・ピカソがいます。恐らく、彼の作品といえばゲルニカなどの所謂キュビスムの作品を思い浮かべる方が多いと思います。幼い頃本当の彼の凄さを知らなかった私は、ゲルニカを初めて見た時、芸術というものは全然わからないと思ったものです。なぜなら、その時までは写実的な作品こそが素晴らしいと思っていたからです。十七歳の頃、図書室で偶然手に取った画集を見ていた時、ある写実的な素晴らしい絵が目に留まりました。まるで写真の様でとても絵とは思えないその作品は、「科学と慈愛」という題名で、死の床にある婦人の左側には最後の脈をとる医者（科学）、右側にはその婦人に幼児を抱きながら末期の水を差し出す修道女（慈愛）という暗い絵でしたが、何か強く訴えかけるものがあり大変意味深い絵であると感じました。一体誰の作品なのかと調べてみると何とピカソの作品でした。ゲルニカの様な作品しか知らなかった私は驚愕しました。

この作品は、一八九七年にピカソが十五歳という若さで描いた作品でマドリードの国展に出品されたそうですが、そのあまりにも高い完成度から年齢を詐称しているのではないかと言われていたそうです。この作品の空間や光と影の描写、人間の表情、そして何よりもその絵から伝わる心を打つもの、当時の私と似たような年頃の少年が描いた作品だとはとても信じられませんでした。キャンバスという限られた空間にピカソが何を伝えたいのか、その世界観が凝縮されている大作を見て、彼が天才と呼ばれた由縁が瞬時に理解できました。この時を境に芸術というのは技術力が高いだけではダメで観る者の心を惹きつける哲学が大切なのだという事に気付かされ、様々な角度から絵画を鑑賞できるようになったと思います。

私は、二〇一三年に三代目として三十五歳で社業を引き継ぎました。そして関係者の方々のお世話になりお陰様で今年の一月に会社創立七十周年を迎えることが出来ました。

引き継いだ当初は経営の事など分かる筈もなく何が大切なのだろうかと悩んでいましたが、大先輩の方々のお話し等で大切な事とは、「哲学を作る事」、「揺ぎ無い目標と信念を持つ事」、「環境を作る事」の三つであると感じています。実は、この三つは芸術とも通じる部分があります。例えば、ピカソですと彼の作品の中に彼の哲学を表現しています。また、天才と言われた写実的な絵を敢えて破壊して批判に耐えつつ信念を持って新たな世界を創造しています。そして、キュビスムの世界的な地位を確立しようと仲間を作り芸術の領域を広げる環境作りをしています。

弊社の社名は、創業者が過去、現在、未来を表す仏教用語である三明から過去に学び、未来を見据え、現在にベストを尽すという意味を込めて命名しました。現在、世界は様々な事が起きて予測することが難しくなっています。歴史は繰り返すと言われますが、こういった時代だからこそ原点に還り社名にある創業者の哲学を心に刻み、更に自分なりの哲学とビジョンを持って変わり行く時代に対応し、百年企業を目指して頑張っていかなければならないと思っています。今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。